

「*Mikurensis*-みくらし島の科学-」発行によせて

未来に続け人の輪

山階鳥類研究所 岡 奈理子

御蔵島に生息するオオミズナギドリの分析試料の収集で、里から御山へ続く険しい山道をテントを背負って這うように登ったのが、初めての御蔵島入島だった。1976年夏のことだ。

以来、半世紀近くの歳月が経つ。このたびの本誌発刊の趣旨である、島で得た知見、知識の島民への還元と呼びかけに共鳴し、起稿させていただくのを光栄に思うと同時に、始め易し、続け難しが定期刊行ジャーナルの宿命、と思うだけに、「*Mikurensis*-みくらし島の科学-」が年ごとに途切れることなく未来に繋がり、特色ある島づくりに貢献することを、念じてやまない。

過ぎし時代を振り返れば1990年代半ば以降、御蔵島はとりわけ変貌した。その変貌を牽引したのはイルカだろう。特に若い女性をとりこにし、島の里は春から秋にかけてイルカウオッチング一色になる。同じ海洋動物のオオミズナギドリは、島を訪れる観光客からは相変わらず距離を置くように見える。照葉樹林の茂る険しい斜面に夜だけ、たいそう賑やかに戻り、昼間は姿も声もない生態のためだ。しかし何かを考えているようで、いないようで、傍若無人なようで繊細で、謎解きに誘惑する点では、魅力はイルカに劣らない。幾つもの仕掛けがあれば、オオミズナギドリは間違いなく、御蔵島のエコツアーの人気者になるだろう。

確かにこのオオミズナギドリ、私だけでなく、若い学生をとりこにしてきた。島の南東部の南郷はオオミズナギドリの繁殖地の真っ只中にある。村里から南郷への山岳道路（都道）が開通した1990年代に南郷の1軒の住居の、抜け落ちていた床や壁が故栗本節夫古老の手で修復され、私は長く、このライフライン（公営水道・電気）のない「南郷山荘」をオオミズナギドリの生態調査の基地にさせていただいた。オオミズナギドリを卒研や修論テーマにした東京農工大学の学生や、今世紀に入り博論テーマにした北海道大学や総合研究大学院大学の学生も南郷を巣立った。生態調査は、ヒナを対象にすると昼間だが、親鳥を対象にすると帰島時刻に合わせて夜になる。特に親を対象にした今世紀は、南郷へ入るとがぜ

ん夜活動し、昼は眠る昼夜逆転の生活を続けた。生活基盤の南郷山荘のお陰で調査設計も楽になり、体力と精神力を自負するごつい学生を安心して導けたが、繁殖期が春から晩秋までと、実に悠長なオオミズナギドリの繁殖期の生態調査は、それでもいろんなハンディに直面する。沢から直接水を引く管が詰まり、飲み水はもとより生活水にも事欠く時、発電機や車の故障、調査機器のバッテリー充電、分析試料の冷凍保管などなど、里の古老に幾度となく支援をいただいた。だから、台風の直撃で崖が崩れどんなに道路が寸断され孤立しても、私たちは、ひるまなかつた。

以前、御蔵島の人とオオミズナギドリをエッセーで綴ったことがある。依頼を受けて始まった月刊浄土宗新聞の巻頭頁で連載した 24 編のエッセーの中から、このたび許諾を得てその 1 篇を転載し、発刊の祝辞として締めくくらせていただく。エッセーは毎号 1 枚の写真とともに掲載した。このエッセーに添えた写真は、稲根神社に収蔵されていたオオミズナギドリこと、かつおどり猟の絵馬であった。正装した宮司が絵馬と一緒にファインダーに納まって下さった。

「自然から恩を受けるルール」

有吉佐和子の著作に「海暗」がある。離島に暮らす村人たちの、風土に根ざした生き様を、実際にあった射爆場設置への反対運動を通して描いた秀作だ。海暗は黒潮の別称だ。

舞台になった伊豆七島の御蔵島は直径 5 キロの円形の島で、海拔 800m もの頂きを持つ。高い海蝕崖が島を縁取る。崖上の斜面をだんだんに切り取り、村人が文字通り肩を寄せ合い暮らす。島の人口は、百人ほどだった江戸中期を除くと、二百年近くにもわたり二～三百人台の幅を推移するに過ぎない。人口のこの安定は、冬の島の孤立がもたらす厳しい人口抑制の結果である。

オオミズナギドリに魅せられ、この島を幾度か訪ねた。タブヤスタジイなどの照葉樹林が覆う美しい島だ。

暖海性の海鳥オオミズナギドリは、西太平洋の亜熱帯海域の島々で繁殖する。大半が日本の島々だ。地面に穴を掘って子育てする。晩秋、赤道海域まで南下し、春先に戻ってくる。かれらは繁殖の一時期を除いて洋上で生活し、表層を泳ぐイワシやイカをもっぱら捕食する。漁師の間ではカツオドリなどの別称を持つ。魚群探知機のなかった時代、この鳥の群翔がカツオ漁の格好の指針になったからだ。

御蔵島は、オオミズナギドリの最大の繁殖地の一つである。

御蔵島の村人とオオミズナギドリには長い共生の営みがあった。村人はオオミズナギドリを個体数を減らさない確実な方法で数百年にわたり食用にし、しかも採集する一方で、手厚く保護してきた歴史を持つ。

御蔵島には不文律の形をとった独自の採集規則があった。猟が許されるのは秋の二～三日間だけで、しかも雛に限る。卵と親鳥にいっさい手をつけなかったところに、御蔵島での牧鳥思想の要がある。年一卵しか産まず、巣立ち雛の自然死亡率が高く、しかも五～六歳で初繁殖する特有な生活型の鳥だということを熟知したゆえの、採集への賢明な自主規制である。採集された雛は、塩蔵肉だけでなく、骨や内蔵まで塩辛にして大事に保存され、村人の冬の貴重な蛋白源となった。急な斜面が海に落ち込む御蔵島には、近年まで船着場がなく、海の荒れる冬期は、外界から隔絶された。隔絶生態系の中で、元本を減らすまでに採り尽くすと、自らが飢えで窮地に立つことを承知した上での採集哲学である。

北海道の主要な繁殖地の一つ、渡島大島でのオオミズナギドリ個体群の壊滅が、磯の魚介類やコンブ漁に来訪する沿岸漁民の、親雛かまわぬ略奪的な採集行為に起因したのと、好対照をなす。

自然物を恒久的に利用するためには、生態系の仕組みを熟知した賢明な方途が不可欠だ。

御蔵島の自然物との上手なつきあい方に、有限な地球に暮らす私たちの明日の指針がある。

【浄土宗新聞 1993年8月号(通号318号)巻頭頁から転載】